

日向薬事始め (その9)¹⁾

— 日向出身の、華岡青洲および賀川玄悦 (賀川流・産科) 門下生とその周辺 —

山本 郁男^{1a,2} 宇佐見 則行^{1a,2,4} 程 炳鈞^{1b} 岸 信行^{2,3}

Historical Studies on the Origins of Pharmaceutical Sciences
in Hyuga (Miyazaki) (Part 9)

— On Some Students Studied under Seishu Hanaoka in Wakayama or Osaka and Genetsu
Kagawa in Kyoto during Edo-Late Period from Hyuga (Miyazaki)

Ikuo YAMAMOTO^{1a,2} Noriyuki USAMI^{1a,2,4} Cheng Bing Jun^{1b} and Nobuyuki KISHI^{2,3}

Abstract

This paper deals with eight young men, Ryusuke Yuge, Toshihide Nakamura, Shunkei Yuchi, Mototatsu Inoue, Shouhei Odate, Michitaka Kiwaki and Doukei Iida studied under Seishu Hanaoka (Wakayama or Osaka), and Korechika Kuwahara also studied under Genetsu Kagawa (Kyoto) in Edo-late period from Hyuga (Miyazaki).

Key words : Seishu Hanaoka, Genetsu Kagawa, Michitaka Kiwaki, Doukei Iida, Korechika Kuwahara, Surgery, Gynecology, Edo-Late Period, Hyuga

キーワード : 華岡青洲 賀川玄悦 木脇道隆 飯田洞敬 桑原惟親 外科 産科 日向 江戸時代後期
2010.11.17 受理

緒言

報告する。

著者らは、これまで江戸時代、延岡藩を中心とする日向国の医薬の発展に何らかの貢献をした医家の動向を数少ない文献と史跡を頼りに系統的にまとめようと考え、そのいくつかを報告してきた^{2,8)}。

本報では江戸時代中・後期の医家で華岡流外科の創始者、全身麻酔の実施で有名な華岡青洲と同時代に活躍した賀川流・産科の祖、胎児の正常胎位を発表した賀川玄悦をとりあげ、彼らの門人となった日向の若者達、前者に7名、後者に1名存在することを調査したのでここに

時代的背景

既報^{2,8)}にも断片的に時代的、歴史的背景を述べたが、ここでは華岡、賀川という2人の外科、産科医を紹介するため近世の我が国における医学の発展史を要約する^{9,17)}。

16世紀、天文21 (1552) 年、ポルトガル人、外科医ルイス・デ・アルメイダの渡来以前は、主に中国医学(漢方)が主流であった。すなわち、内科を主体とした漢方医学が全国を席卷していたが、戦国時代、カトリック

¹九州保健福祉大学 薬学部 ^a衛生薬学講座、^b東洋医薬学研究室 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

^aDepartment of Hygienic Chemistry, ^bLaboratory of Chinese Medicine, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-shi, Miyazaki 882-8508 JAPAN

²九州保健福祉大学QOL研究機構 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

Quality of Life Research Institute in Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-shi, Miyazaki 882-8508 JAPAN

³宮崎・日向・富高薬局 〒883-0014 宮崎県日向市原町3-6

Tomitaka Pharmacy, 3-6 Hara-machi, Hyuga, Miyazaki 883-0014 JAPAN

⁴奥羽大学 〒963-8611 福島県郡山市富田町字三角堂31番1

Laboratory of Analytical Sciences, School of Pharmaceutical Sciences, Ohu University, 31-1 Misumido Tomita-machi, Koriyama, Fukushima 963-8611 JAPAN

布教と共に西洋医学（カトリック医学）が導入された。これ以後、外科、眼科、産科など手術を含めた西洋医学が大いに発展した。この過程はカトリック医学→南蛮医学と鎖国下でありながら、17世紀に入ると確実に我が国に浸透していった。「これからは西洋医学である」という認識が医学に携わる人々の間に一気に広がった。ところが、幕府の禁教鎖国令により、スペイン、ポルトガル人は追放され、それに代わってオランダ、イギリス両国との交易が認められるようになった。この因は、もともと南蛮医学は、16世紀の中頃に興ったポルトガルとスペインの医学であるが、慶長5（1600）年、豊後（大分）に漂着したオランダ船リーフデ号の船員、ヤン・ヨーステンおよびウィリアム・アダムス（後に日本名三浦按針）を徳川家康が取り調べたことから、家康はイギリス、オランダ両新教国と親密となった。イギリスは平戸に開設していた商館を元和9（1623）年に閉鎖、10年たらずで日本から引き揚げた。ここに真の意味のオランダ医（蘭学、蘭医術）が、長崎の出島を拠点として日本各地に広がったとみるべきであろう。

蘭学が本格的に興ったのは、安永3（1774）年、杉田玄白、前野良沢らによる「解体新書」ターヘル・アナトミアの発行である。その後は、大槻玄沢（芝蘭堂）や緒方洪庵（適塾）⁶⁾など各地に蘭学塾が生まれた。しかし実質的な西洋医学はドイツ人であるが、ウルツブルグ大学で医学を学びながらオランダに移住して国籍保護のままオランダに就職することを許可され、二重国籍者として文政6（1823）年、長崎に来日したシーボルト以後にある。シーボルトは6年間滞在中、鳴滝塾を設け、幾多の日本人の蘭方医を育成したのである⁷⁾。この研究の中では、まだとりあげていないが、シーボルトによってもたらされた天然痘との闘いの歴史は我が国における免疫学、公衆衛生学の始めであり、種痘は細菌、ウイルス学の発展をもたらした。「日向における種痘」については別に報告の予定である。しかしながら、このような異国の医学の流入に反発したのは他ならぬ漢方医達であった。幕府による嘉和2（1849）年の蘭書翻訳取締令や眼科と外科以外の医師の侍医採用禁止令がこれである。にもかかわらず、前述の如く、西洋医術は急速に日本全国に拡大していった。すなわち、ペリー来航など世情が騒然とする中で若者達の政治、経済のみならず医学に対する情熱は目を見張るものがあるといえよう¹⁷⁾。

この時代の日向諸領の分布図を図-1に掲げる。

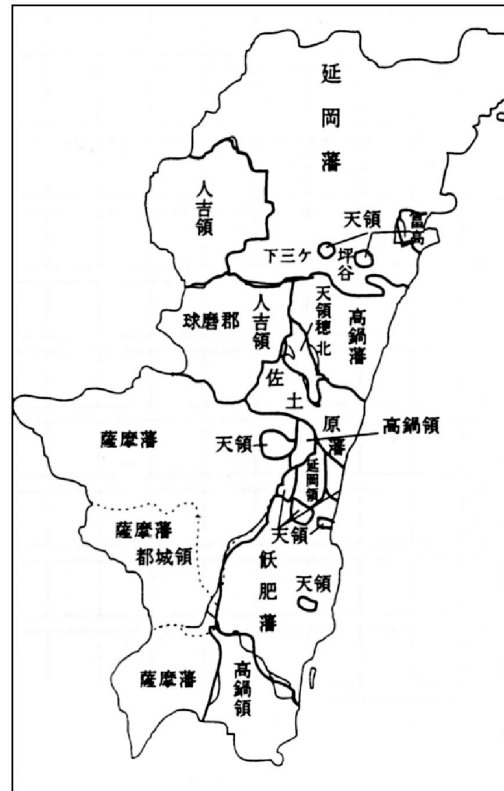


図-1 江戸時代中・後期の日向諸領

日向における医家列伝一師との関係^{2-8,10,12)}

これまで著者らは、日向（宮崎・鹿児島）出身の医家としての関係を延岡における医祖といわれる渡邊正庵⁴⁾を始めとする医者および儒者などの師弟関係を調べ、大略、図-2のような関係を明らかにしている²⁻⁸⁾。すなわち、渡邊正庵、渡邊元安の師は京都の伊藤仁斎、伊藤東涯であり、また、豊後（大分）の本草学者、加来飛霞を招き、日向高千穂の採葉調査を行わせた医師、秋月橋門²⁾がいた。渡邊元安と秋月橋門は共に日田（大分）の広瀬淡窓（咸宜園）⁶⁾の門下生である。特に、新妻金夫と早川図書による医学所「明道館」の創設は、九州保健福祉大学の創立と無関係ではないと著者らは見ている⁸⁾。

このような歴史的背景があればこそ、日向における医育の発展があったものと考えられる。日向にとっても華岡流外科、あるいは賀川流・産科の医術の導入は当時の喫緊な要望であったのであろう。

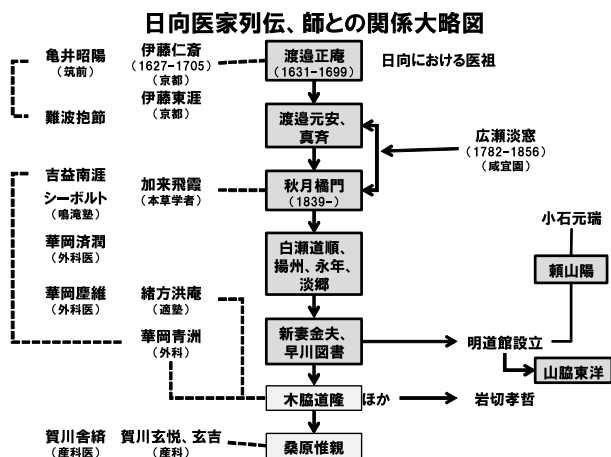


図 - 2 日向医家列伝、師との関係大略図



図 - 3 華岡青洲の像

華岡青洲と医術¹¹⁻¹⁶⁾

日向出身者を門人とした江戸中期の外科医、華岡青洲はよく知られているが、ここで彼の人と業について記述しておく。

華岡青洲は宝暦10 (1760) 年、医師、華岡直道 (尚道という説あり) の5人の兄姉中の長男として紀伊国那賀郡名手荘西野山 (和歌山県紀の川市西野山) に生まれた (図-3、4)。諱は震 (ふるう)、字は伯行、通称は雲平、号は青洲。随賢という名は華岡家の三代目としての名である。祖父、雲仙尚政以後、医師を営む。天明2 (1782) 年、22歳の時、京都に出て、吉益南涯 [江戸中・後期の医師、寛永3 (1750) ~文化10 (1813) 年、東洞の子] に古医方^{註1)}、傷寒論を基とする医術を3ヶ月学ぶ。後に、大和見水 [寛永3 (1750) ~文政10 (1827) 年、江戸中・後期の医師、伊良子道牛門下生] にカスバル流外科 (オランダの医師カスバルが日本に伝えた外科) と、伊良子流外科 (伊良子道牛が古来の東洋医学とオランダ外科学を折衷した医術) を1年間学ぶ。天明5 (1785) 年、帰郷して父・直道の後を継いで開業。しかし、全身麻酔における乳癌手術の成功は、これから数えて20年後となる。京都滞在中の永富独嘯庵 (ながとみ どくしょう あん) [享保17 (1732) ~明和3 (1766)、江戸中期の天才的漢方医] の著、「漫遊雑記」中の乳癌の治療法にヒ



図 - 4 華岡青洲像 (日本郵便切手)

ントを得て麻酔薬の開発研究を始める。その結果、遂に曼陀羅華 (チョウセンアサガオ) (図-5)、草烏頭 (トリカブト) 等を主成分とした6種類の薬草に麻酔効果があることを発見した。しかし、有吉佐和子著、「華岡青洲の妻」(図-6) でも有名なように、実母の於継と妻の加恵が実験台となり、於継の死、加恵の失明という犠牲の上に、全身麻酔薬「通仙散」を発見するに至った。文化元 (1804) 年、大和国、宇智郡五條村の60歳の女性に対し、「通仙散」を用いて乳癌摘出手術に成功。天保6

注1：江戸時代の漢方の医家の流派。かつての思弁的観念的傾向を深めた金、元時代以後の医学 (これを後世派という) を批判し、経験と実証を重んずる古代医学の精神に基づいた治療の改革を主張。この説をとる医家を古方家という。江戸前期の医師、名古屋玄医 [寛永5 (1628) ~元禄9 (1696) 年] に端を発し、後藤良山により確立。香川修徳、山脇東洋、吉益東洞らがいる。



図-5 曼陀羅華 (朝鮮朝顔)



図-7 華岡青洲の墓

(1835)年死去、享年76歳(図-7、8)。

この華岡青洲による全身麻酔手術の成功は、これより下ること1846年アメリカのウィリアム・T.G.モートンによるジエチルエーテル(エーテル麻酔)を用いた麻酔手術が報告されているが、それより40年も前ということになる。青洲はオランダ式の縫合術のみならずアルコール消毒法を行い、乳癌だけでなく、各種の腫瘍摘出、脱疽、痔疾、膀胱結石などさまざまな手術を実施した。

華岡青洲の学理は「内外合一、活物窮理」、すなわち内科と外科とを区別せず同一とした(図-9)。従来の内科が主であった漢方医学とオランダ医学を同一視。実験や実証の上に立つ医術を最上最高とした。



図-8 華岡青洲の背後にある加恵と於繼の墓

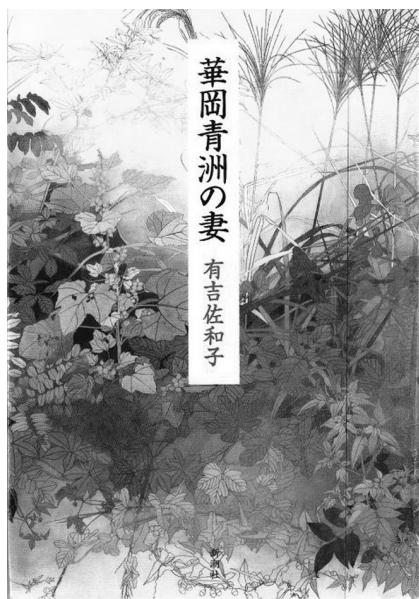


図-6 有吉佐和子著「華岡青洲の妻」



図-9 活物窮理の碑

華岡青洲の有名な処方薬を次に記す^{15,18)}。

1) 十味敗毒湯 (ジウミハイドクトウ) 適応症：皮膚の発赤、痒みを抑え、腫れや化膿を鎮める。また、体質改善。体力の減少の向上にも有効。組成は皮膚病の病因を発散、抑制する「荊芥」や「防風」。排膿を助けるサポニン含有の「桔梗」、炎症をひく「柴胡」、血行をよくする「川芎」のほか甘草、生姜、樸椒、独活を含む。

2) 中黄膏 (ベルクミン) 適応症：化膿性の炎症で、発赤、発熱、痛みを伴う症状に有効。皮膚疾患では皮膚の化膿性炎症 (赤く腫れて痛みを伴うか、まだ破れ潰れていないもの、できもの、外傷 (腫れて熱感を有し、痛みを伴うもの)。

<できもの・外傷>腫れて熱感を持ち、痛みを伴う
薬理作用：消炎・鎮痛・排膿作用

効能：清熱・止痛、消炎解毒作用のある苦寒生薬 (連翹、黄連、芍薬などを含む) の組合せで、除熱、排膿する。

3) 紫雲膏適応症：患部が乾燥し、肉芽形成が遅れているもの、皮膚疾患、外傷 (化膿が顕著でなく、分泌物もさほど多くなく、しかも深い傷でない場合)、皮膚乾燥、肌荒れ。

薬理作用：消炎・肉芽形成促進・保湿作用

効能：潤肌・止痛、アトピー性皮膚炎、皮膚の発赤は無いかあるいは軽度で、乾燥してつやが無く、時に皮膚に萎縮が見られる場合

4) 通仙散適応症：先に記した約6~10種類の生薬であるが、全てよく分かっていない。(図-10) 烏頭はプシあるいはオウとも言う。漢方では、鎮痛、新陳代謝の機能亢進、強心のために使用。曼荼羅華 (マンダラゲ) は

鎮痙、喘息、鎮静、鎮痛に、川芎は強壯、鎮痙、補血、鎮静に、当帰は強壯、鎮痙、通経、鎮静(婦人病)に、白芍は浴湯剤、婦人病に有効とされている。

華岡青洲の師弟関係 (全国)

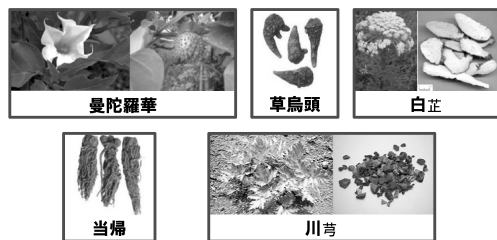
華岡青洲の教育の場は、次の2つの学塾によってなされている。1つは紀州平山 (和歌山) にある平山本塾といわれる「春林軒」、ほかの1つは大坂分塾「合水堂」である。全国各地から青洲の全身麻酔手術の成功を聞いて集った若者は、大隅、壱岐の二国を除いて8,870名を超えたといわれる。中でも優秀な門人には前述の永富独嘯庵のほか、本間玄調 (棗軒)、中川修亭、難波抱節 (立愿)、鎌田玄台、熱田玄庵、館玄竜、三村玄澄、原順吾らがおり、彼らが我が国の江戸時代の外科技術を大いに発展させた。その一人、本間玄調は弟子の中でも傑出していたが、青洲の秘密主義を破って秘術を無断で公開し、破門となっている。

また、華岡家の家系についても文献があり、祖先は楠木正成で知られる南朝方に属し、河内国石川郡中野村華岡 (現在の大阪府富田林市) であることから、南朝方の祖である和田正之 (楠木氏の一族) が後醍醐天皇の崩御後、華岡に改姓したものと考えられる (図-11)。これが華岡家の始まりであろう。初代の名は華岡伝之丞と伝えられている (図-12)。この初代は畠山氏 (高政) に仕えていたが、畠山氏が滅亡したため、紀伊国麻生津荘の赤沼田に移住。

初代の華岡伝左衛門は、その子華岡伝右衛門尚親の代になって医師となっている。以後が青洲の祖先となる。この尚親は名手荘西野山村に住む。寛永年間 (1624~)

華岡青洲の通仙散の配合

曼陀羅華	_____	8分
草烏頭	_____	2分
白芷	_____	2分
当帰	_____	2分
川芎	_____	2分



細かく碎き、煎じて滓を除いたものを温かいうちに飲む。2~4時間後に効果発現。

図 - 10 華岡青洲の用いた通仙散の生薬図

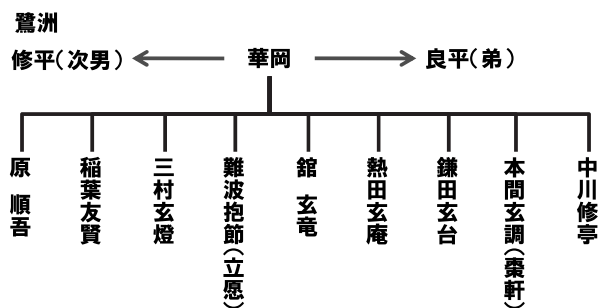


図 - 11 華岡青洲の門下生

に村内の丘陵を開墾して「平山」と命名。久兵衛宗英までは医師と農業を兼業とする。しかし、華岡雲仙尚政の代から医を専業とした (図-12)。

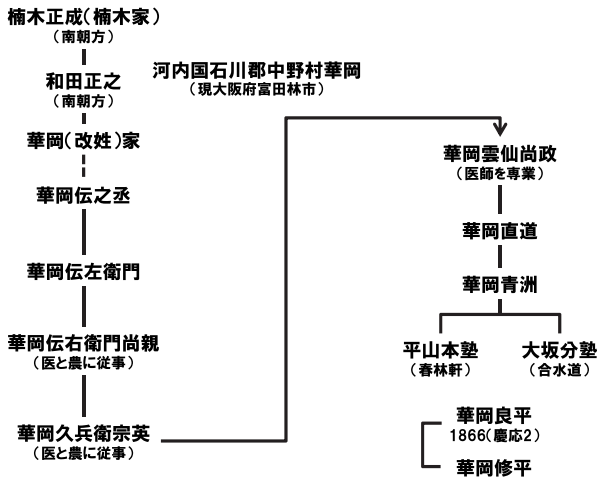


図 - 12 華岡家家系図

日向出身の華岡青洲門下生^{10,12)}

上述のように、華岡青洲の学塾は紀州の平山にある「春林軒」と大坂にある「合水道」である。この両方で、日向出身者は7名が知られている。

以下、彼らの名を記すが、詳細不明のものが多い。

1) 平山本塾「春林軒」在籍者

- ①弓削隆助：日向飫肥藩（宮崎県都城市）出身であり、文政10（1827）年に入門とあるが、それ以上は不明である。さらに調査の必要がある。
- ②中村俊英：日向高鍋藩（宮崎県高鍋市）出身であり、安政2（1855）年に入門、詳細不明。

2) 大坂分塾「合水道」在籍者

- ③由地春溪：日向飫肥藩（宮崎県都城市）出身、文政3（1820）年に入門とある。
- ④井上元達：日向佐土原藩（宮崎県佐土原市）出身、天保8（1837）年に入門している。
- ⑤大館尚平：日向飫肥藩（宮崎県都城市）出身、天保8（1837）年、上記の井上元達と同時に入門している。
- ⑥木脇道隆は一寸変わった履歴の持ち主である⁶⁾。

安政6（1859）年に一度、大坂の緒方洪庵の「適塾」に502番として入門の事実がある。日向飫肥藩（飫肥郡那珂郡伊藤修理大字中）出身者。万延元（1860）年に「合水道」に入門しているので、「適塾」を入門後3年ということになる。恐らく、適塾の内科的医術に飽き足らず、当時、世間に知られた外科の花とされた青洲門に移ったものと思われる。他、年月日や死亡年は不明。江戸末期軍医として戊辰戦争に官軍として参戦もしている。

- ⑦飯田洞敬（いいだどうけい）は、延岡藩（宮崎県延

岡市）に属しており、若干の資料もあるので次に記す（図-13）。幼名は生駒。飯田理庵（士検）の長男。宮崎郡佐土原藩大字上田島に弘化3（1846）年生まれる。文久2（1862）年、16歳の時、飯田家を相続。文久3（1863）年、延岡にて医師、河野養貞および三浦玄昌の下で漢方内科、外科を2年間学ぶ。



若き日の洞敬 これは、京都で撮影されたものだそうで、戊辰戦争では、佐土原藩の軍医として行動した。

図 - 13 若き日の飯田洞敬¹⁰⁾

慶応2（1866）年、大坂にて華岡良平、華岡修平の下で華岡青洲の教え「活物究理学」を研究する。慶応4（1868）年、佐土原藩軍医として奥羽戦役に従軍。明治2（1869）年から3年間、鹿児島縣雇用の英国医師ウィリアム・ウイルス〔（1837-1894）英国公使館付医官〕に内外科、眼科を修学。明治6（1878）年、佐土原（自宅）で開業。没年不明。

賀川玄悦と医術^{10,12,15)}

近代産科の礎を築いた名医、賀川玄悦は賀川流・産科の創始者としてその名を知られている（図-14）。

図 - 14 賀川玄悦像¹⁵⁾

その家系と弟子達には、蒼々たる人物がいる。

賀川玄悦の功績としては、まず第一に正常胎位の発見を挙げねばならない。その発見は寛永3（1750）年になされたもので、米国の産科医ウィリアム・スメリーと殆ど同時期である。妊娠中期において「上臀下頭」、すなわち、頭が下で尻が上という。彼の第二の功績として、不朽の名著として、67歳の時に「産論」（図-15）を公表している。第三はその実証精神にあり、死産の際に苦しむ妊産婦を楽にし、母体の安全を期し、救うという回生術を生み出した。このため、11種の治術を発明創案した。第四は「千の命があれば、千の生きていく意味がある」を唱えた。現在の人間の尊厳、命の大切さ、人生の意義に通じる医の精神、ソクラテスの教えを提唱した初めと考えてよい。

賀川玄悦は、元禄13（1700）年、江州彦根で生まれる。名を光森、字は子玄。父は長高といい、槍術をもって名あり代々彦根藩主に仕えた。玄悦は庶子で禄をつぐことができないため、7歳で家を出て母の実家に養われて賀川姓を名のる。

玄悦は農をきらい、鍼灸・按摩の術を学んだ。壮年に及んで、さらに医学を学ぶため故郷を出て、京都に行き一貫町に住み、昼は古鉄銅器を商い、夜は鍼灸を施して生活の糧を得ながら独学で古医方を学び産科を独習。この間に玄悦は按針十二法を案出。この一貫町には、以後八代玄道が徳島に移住する明治2（1869）年まで約100年余り、ずっと住みついている。

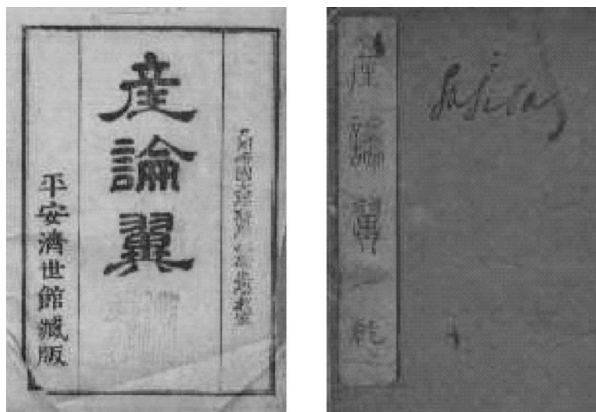


図 - 15 賀川玄悦著「産論」¹⁵⁾

先にふれたように、玄悦の多くの独創的業績のうち、最たるものは正常胎位の発見である。古来、洋の東西を問わず胎児は子宮内では頭を上臀部を下にして位置しており、陣痛が始まると一回転して頭が下に向かうと考えられていた。これが誤りであり、妊娠中期頃から頭が

下に位置するのが正常であることを初めて唱えたのは、西洋では米国の産科医ウィリアム・スメリーであり、日本では玄悦であった。二人は何の関連もなく寛延3（1750）年前後にこのことを発見した。

玄悦は『産論』にこのことを記しているが、当時大方の人々はこれを読んでも信用せず、杉田玄白でさえ後のスメリーの「解剖図譜」をみて、やっと玄悦の説が正しかったことを知ったくらいである。

玄悦の旺盛な実証精神は数々の新発見につらなり、回生術をはじめ十一種の治術を発見、創案した。また『産論』の中で、古来広く慣用されてきた産椅や腹帯の害を力説して、旧来の悪習の廃止を唱えた。玄悦の業績はすべて目で確認し、手指で試みた結果であり、推論や想像は一つもない。

玄悦不朽の名著『産論』は、学がなく文章が幼稚であった玄悦のために、大儒者、皆川淇園が筆をとったものである。時に玄悦67歳であった。安永6（1777）年、78歳で没す。墓所は京都王樹寺にある。

日向出身の賀川玄悦門下生

賀川玄悦の唯一の日向出身の門下生として、桑原惟親がいる。彼を中心に抜粋すると図-16のようになる。

桑原惟親は安永6（1777）年、延岡の北、日向島浦に生まれ、父、桑原順智（肥前の出身）と共に東郷より飢

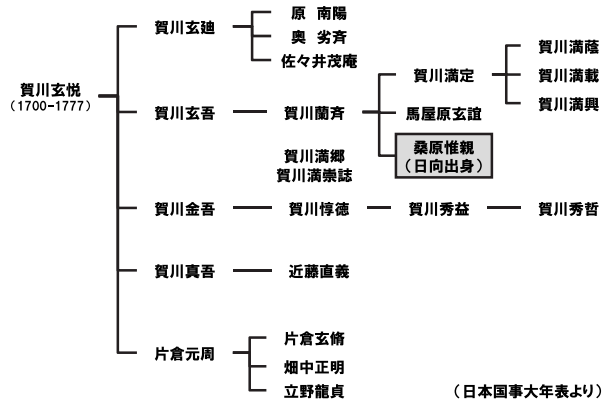


図 - 16 賀川玄悦門下生

肥（北郷郷之原）に移住した。通称、寿庵、字は敬夫、号は甘谷。幼少より医学の志があり、21歳の時、豊後（大分）の佐藤玄圭の門に学ぶ。その後、京都に上って、京都の賀川玄悦の子、賀川玄吾、さらにその子、賀川蘭齋に5年間学び、高弟と称される。内科外科に通ずるも特に産婦人科に精しい。帰郷後開業、蘭齋の発明した「探

領器」を用い、患者は門前市を成すの盛況であったという。著書に「産航」がある。嘉永元(1848)年71歳で没。しかしながら、不思議なのは賀川流・産科に学んだ日向出身者は、この桑原惟親のみで、他の若者の名を見ない。これは著者らの想像であるが、恐らく惟親があまりにも偉大かつ有名であったので、彼に続く者が多くありながら、歴史に残っていないと考えられる。今後の調査を必要とする。墓は飢肥、大竜寺跡、願成就寺にある。

華岡青洲と賀川玄悦の関係

同時代に蘭学・蘭医を修め、共に外科、内科学の道を推し進め、実証主義的医学を確立した両者は、難波抱節

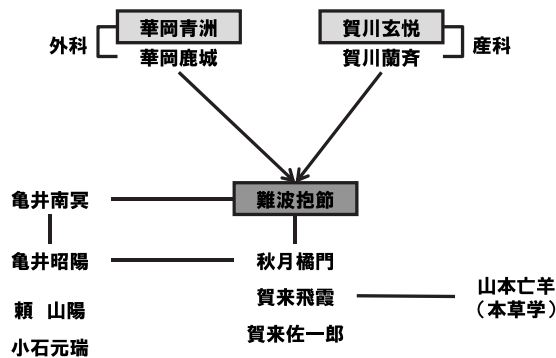


図 - 17 華岡青洲と賀川玄悦との関係図

(立愿) [寛政3 (1791) ~ 安政6 (1859) 年、江戸時代後期の医師。名は経恭、字は子敬、号を抱節、普通、立愿と呼ばれる]を通じて交流がある(図-17)。彼は京都で産科、内科、外科を学んでいることから推定できる。

まとめ

曼陀羅華を用いた全身麻酔手術で有名な華岡青洲と妊婦の胎児の正常位を提唱し、世界的な発見をした賀川流・産科の創始者、賀川玄悦をとりあげ、彼らを取り巻く師弟関係を明らかにし、彼らの下に医術を学ぼうとした日向出身の8名の若者、弓削隆助、中村俊英、由地春溪、井上元達、大館尚平、木脇道隆、飯田洞敬(以上華岡門人)並びに桑原惟親(賀川門人)を調査した。

謝辞

本論文作成に当たり、種々資料の御提供を頂いた延岡市薬剤師会、大崎春光先生に深謝する。

参考文献

- 1) 山本郁男, 宇佐見則行, 程 炳鈞, 岸 信行: 日向薬事始め(その8) - 日向出身の、小石元瑞(京都) および榎林鎮山、栄哲(長崎) 門下生とその周辺 - . 日本薬史学会2009年会(金沢) 講演要旨集: p28, 2009.
- 2) 山本郁男, 岩井勝正, 井本真澄, 宇佐見則行: 日向薬事始め(その1) - 秋月橋門とその業績 - . 九州保健福祉大学研究紀要 6 : 277-285, 2005.
- 3) 岩井勝正, 井本真澄, 宇佐見則行, 山本郁男: 日向薬事始め(その2) - 加来飛霞と延岡での採薬 - . 日本薬学会第125年会(東京) 講演要旨集4: p219, 2005.
- 4) 山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 岸 信行: 日向薬事始め(その3) - 延岡の医祖, 渡邊正庵とその周辺 - . 九州保健福祉大学研究紀要 8 : 187-192, 2007.
- 5) 山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 岸 信行: 日向薬事始め(その4) - 延岡藩侍医, 白瀬道順と白瀬永年 - . 九州保健福祉大学研究紀要 9 : 169-175, 2008.
- 6) 山本郁男, 井本真澄, 宇佐見則行, 岸 信行: 日向薬事始め(その5) - 日向出身の、緒方洪庵・適塾と広瀬淡窓・咸宜園に学んだ人々 - . 九州保健福祉大学研究紀要 10: 209-216, 2009.
- 7) 山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 岸 信行: 日向薬事始め(その6) - 日向出身の、シーボルトとボンベ門下生およびその周辺 - . 日本薬史学会2008年会(大阪) 講演要旨集: p17, 2008.
- 8) 山本郁男, 井本真澄, 宇佐見則行, 岸 信行: 日向薬事始め(その7) - 延岡における医学所「明道館」の設立と藩士教育 - . 九州保健福祉大学研究紀要 11: 169-175, 2010.
- 9) 中西 啓, ニッポン医家列伝-日本近代医学のあけぼの-, (株)ピー・アンド・シー発行, 2010.
- 10) 社宮崎県医師会: 宮崎県医史, 1978.
- 11) 日本人名事典, 平凡社, 東京, 1966.
- 12) 宮崎県百科事典, 宮崎日日新聞社, 宮崎, 1983.
- 13) 世界人名事典, 岩波書店, 1993.
- 14) 科学人名事典, 丸善, 1997.
- 15) フリー百科事典「ウィキペディア」.
- 16) Churchill's Medical Dictionary, Churchill Livingstone, 1989.
- 17) 石坂哲夫, くすりの歴史, 南山堂, 1994.
- 18) 難波恒雄監修, 和漢薬の事典, 朝倉書店, 2002.